

秋之部

下





初月やむらふに家比なき下  
 侍者命松よ喜して初あし  
 いもの美乎月あつ里のやけ細  
 二有ともに見くこと不口か  
 月をくさへはたさく入を藤の宿  
 親も天張下照娘、月比良  
 悪考下照娘もあふ集の席よ又えり余れ  
 抄よ味雅言彦根さる此妹よて天相考の女之  
 かの阿珠さふ屢安夜乙登多京波多廻行ふ小侍  
 勢方屋の本知をよむ出ゆいし娘之是を家比  
 たりぬとくし又三十一文字あふ定りたるもさふ盡  
 きたるし中八亭垣の交是こ



暗辭林又寄紅衣香過々天外心の急を付とん  
 愚考題早竹。早行星尚在教里未天明不弁雲林色空  
 間流水声月後山上落河入身筒横漸至重門  
 外依稀見洛城  
 ぬ二の詩をたゞして屋て乃々た何れ予必其取の  
 詩よ必定せり言よ一ツたふ思候あや此詩を三  
 體詩に郭良の依る能く杜牧の詩よ白を合は  
 せし急不叶郭良の詩よ白を合すれをことえ書  
 の本取よ不叶是必名を以て遠へるや是れ紀行去  
 深られとりと見ゆる郭良の詩を換字してたる  
 よきをたゞしりり

腰間よ寸浪をおひり漣り

白秋八十二

一囊をかけてるよ六十八の珠を  
 折れし僧よ似て若らあや俗よ似て  
 髪さし我侍よあしれとてよ  
 浮屠の属よ半くく非前よ  
 入るをせしきり言て外言し信て  
 化しりたるた一れ不表の臨はの  
 くらく後行ぬしよ又くくまき  
 ちもたう手あはれ信れよよ一玉  
 せころよ深き心を起しよ  
 毎日月より一年の杉を抱 卷  
 愚考腰間よ寸浪をおひり漣の形術法  
 腰よ寸浪をりよ常守へりりり





をいふかゝりぬき 神やうきて風を  
かきよゝむたふくふく 嘆くもたふき  
らふくは 幸ちふとくは ねとく 芥子  
あふら 守徳山や 不村の 古木に  
たくつて 千し世 するを へく 浄懐素  
も是に 幸平をば いらく ぬ法杖  
渠ハ 新紫を えて 竹子よの 力と  
や 一とあり 予 莫く くら びを 氏  
百は 落ふ ねひ 了り ぬ 物 白く され  
安き けい せき ける ぬき

愚考 菊に 東に 歌よ 言ふる 是 陶 例 師の 前 事 師  
を せ び 紫 を せ せ 一 くら にか り 志 毫 の 月

台 村 八 十 七

風土 言 意 此 心 一 命 か ち ぬ り ぬ  
数 株 の 菊 を せ せ へ 其 紫 後 り て  
庭 を ぬ 一 せ せ ぬ を 菊 好 徳  
七 かく る せ せ せ せ 人 呼 び 若 福  
此 名 と 守 徳 門 人 と せ せ せ せ  
菊 枝 け 根 を つ ち ち ち ち ち  
菊 枝 け 根 を つ ち ち ち ち ち  
一 せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ  
若 福 せ せ せ せ せ せ せ せ  
か ね 八 十 歌 の 勝 地 を か へ せ ぬ  
忍 け け 人 一 せ せ せ せ せ せ せ  
せ せ せ せ せ せ せ せ せ せ

ナウのまき草のすきんやめし書跡  
 ねまひとりにありぬへきまゆと  
 を手拵の胸よたくるる人  
 人れワレにを意の石がうひとち  
 あらぬ腕しぬも終よみとせの夾  
 秋をすててふくむをせはよ  
 涙をそく今年お月のあうを  
 花櫛の白ひとさひくまをか  
 されを人しのもちきやむむ  
 よかしくおれぬあうり得ま  
 てふくまき草もやちうま  
 草をつきししう様のねい

与秋 八十六

清けよけつりあう外の枝お戸  
 ぬくつに花散らさく志り  
 南丁向ひ花よ散ふて水橋と  
 ちり地心まま對して案門  
 系減運つたあふなり海印の  
 潮三すのほよたへて月  
 不し便ころらうれを初月  
 の夕たりあふむいよひ雨をさ  
 一む名月のまをわひよと  
 中川草を意をうつたさ  
 ちうしうあうあふまは  
 三ふさく吹をぬく風やと尾





柴門景を遊ぶて斜く柴門を事文其裏二曰穴牙銜  
為戸上釜下方水如室也 三戲詩二 葛仙仙人白  
兔公掉頭為去又系風柴門流水依然在一路寒山万  
木中此詩と合せたりと云ふ へも自然と云ふ  
湖口の海之候工たりて詠實王詩小詩等巖壁等  
荒荒又荒寂寥樓觀滄海日門對浙江潮佳子月中  
落天香雲外飄下略  
芭蕉の茶房小して冬を古りふと云ふなり  
廣東新語二曰草之大者曰芭蕉中略す其大者圍高  
二丈餘葉長大廣尺至三尺中分如幅阜下略す此傷  
阜の如くして法を擣て冬を古くふと云ふなりと云  
子寧云幅阜云々一幅の物をぬきたりと云ふなり

古今八十八

測りたりとのかたうもれと云ふなりと云ふ  
琴操二曰長二尺六寸六分廣六寸上曰池下曰實前廣  
後狹象也 弓也上曰下方法也五弦象五  
行大弦為君小弦為臣文王武王加二弦以合君  
臣のりと云ふなり  
半以をりて風をりて尾以りてカーいぬと云  
輟耕録二曰風尾蕉樹之六丈圍三四尋直如矢从  
上終生枝葉若棕相狀皮如就椹葉以風尾實  
如葉而少略  
又佩文韻府二曰沈明臣詩二龍鬚綠抗風前笋  
風尾葉系系兩後蕉  
香扇影不て風ををかきり心と云古詩二芭蕉開

綠扇又曰華葉に腕里贈章裂斜規扇欲裁  
皆是芭蕉を扇に比才事文藝裏に傍身無教  
者に在る

笠をとりねを斧にありては彼山中不伐の故木に  
たくつてしむれそむら廣祥芳譜に曰芭蕉極繁盛  
大者一圍餘葉長丈許廣一尺至二尺望之如樹を  
それ山中不伐の故木とて左にたるとものく  
最子二大木の章之ヶ取あり其一道遠遊惠子溜に在  
子曰吾有大樹溜之樗其大本擁腫而不中繩墨下  
之三人間生南伯子綦遊乎高之丘見大木焉下略  
其二人間生二匠石之齊至乎曲轅見樗社樹一其  
大蔽牛製之百圍其高臨山十仞而後有枝其可

以為舟者旁十數觀者如市匠石不顧遂行不輟第  
子厭觀之走及匠石曰自吾執斧斤以隨夫子未  
嘗見技如此其美也先生不肯視行不輟何耶曰已矣  
而言之矣散木也以為舟則沉以為楫則速腐  
以為器則速毀以為門戶則液搗以為枹則蠹是  
不材之木也無所可用故能若是之壽之曲轅之  
山の石之匠石と杓者匠の徳くく大木に章のよ  
きに如るに山中不伐の故木とせり  
傍に懷素とて是に筆をこしらるる佩文韻府志  
林に曰懷素居雲夢陵芭蕉直帶幾教万取葉代紙  
而書又書之於裏に曰陸羽作僧懷素傳云貧無  
紙可書尋於故里種芭蕉万餘以供揮洒

十人七三以於詩よ實以華う欲題名字知相訪又恐  
 芭蕉不耐秋此亦よ芭蕉よ文字よを書書の例多し  
 送横渠も新茶を足て修そよ力とせり  
 子寧云張栻集も宋人よて宋名宗詩選よ芭蕉心  
 畫展新枝新展新心暗已随又頗學新心養新  
 徳不隨新茶起新知一是等代台を治せり云々  
 凡兩よ被是安きとや此よ就るも此よ一ありて應よ  
 扱けを忘中と号守詩よ人身の水筆を奪すも性  
 ありて人命以志と云と云又公喫けを何か  
 たりきりるもあると世人よさきて白の意を其初よ  
 たとくきる芭蕉紫をねよかりむと云石川文山よ  
 不二の詩白扇逆掛東海天十人七三の形も有ゆへし

白秋 九十一

袖日記の詞書あり元禄二年此初よ 柱を杉凡松凡  
 う情を割り位香も有良と岱水うお教寄を位よを不  
 名月のとそかひと芭蕉又山極てと云  
 忍降天和二年 武蔵曲といふ集の中より既小  
 芭蕉の海樵書と出さる  
 予うおすよの文候の内よ四友門人保よ也  
 して骨をかき根を分ちて而く 小おくろ  
 三年くよとあり  
 されを元禄五年を世成よ本極てとありし  
 芳良岱水のお教寄の文ハ初茶よて蓮う語  
 といふ集よあり用へるは初任菴の記等と既小  
 三返りて再三茶よ及をれらるよても知へし

木下城懐古

義仲の森は此山の日懸

愚考木下城宮腰岩と数原岩との間にあり  
山崎山の下を巴ヶ岡と云ふは巴山吹の名より  
その川而して義仲の城跡あり祖父も六條新  
官為義三男常刀先生義賢の子仲家義  
政の養子二男為王丸と云ふ父義賢源朝義  
平の討まひを感念を念抱して木下中三橋以  
東遠く抱す依り元徳の後木下中三橋義仲と  
号す

一書より山崎山と云ふは山崎のつぎよて中三橋の  
砥波山の東へ流るる川と云ふなり義仲の跡を以て

白紙九十一

巴山崎の塚ありと云ふ何ぞ塚のありと云ふは  
ありと云ふもそれなりと云ふことなり

袖日記越ヶ城の洞書す云々此之越ヶ城ハ越ヶ  
く義仲平家と合戦して之後中納言維盛の軍  
を破つて之を知度太左衛門を始と云盛は  
橋より七る余誘を亡しぬむ山吹女と越中砥波  
山より討死すといへり云々此ハ巴女と始次命  
を云々云々して和田義盛は嫁して其比奈  
を産むすれを越ヶ城より越ヶの月かたりの  
と云ふへき次なり此国の合戦勝利して其日  
將軍と云く昇進したるに此白ありと云々云々  
義仲二年より木下へ移りて其長女此女を











かきまき馬に付て銭をまき  
 上よのりる山寺堂願のこ  
 におふひきりてたを大け  
 まりれ存りたにおるれおひ  
 成すし天地もたひひのなま  
 を穀の土耕まき守成あまき  
 穀のこやむつたし魚格海完  
 ちと道て猿うちとたち休おハ  
 四十八曲こくやたおまきりて  
 手はまきたま心地せくる歩  
 けりゆく十のさへ解くる免き  
 たるし一ひ志布みそはまきり

白秋九十三

やるしと高時と抄きて西ま生也其少老明まきり  
 ちし一先四門とらちら有川一室門、亦有ふま門、  
 唯有非室門以と天名四門之又流仏の四門あり流  
 けしと道極まぬ度類極まき道極まぬ所。法門を  
 極まぬ者。まきと善提極まぬ見佛の四弘誓願と  
 ちし一度断まぬの四門とらちられを止観大念死  
 四弘誓願もあれしとまきり候よ必室せりりや中  
 度しり善提の四門とらちらあり  
 四州と則須弥四州とらちら一東弗善提人壽五百歳  
 南瞻部州人壽百歳西聖耶尼人壽二百五十歳北俱  
 盧州人壽千歳とらちら一法界地州の大千世界を照  
 する光一輪の月とらちらとらちら一とらちら月とらちら



仰願本師弥陀尊

助我濟度常護念

八月十五日勝誓受上

本師善光如來御前

別善光を以て敬上あり善光親神紙を源山帳の中より  
若入て行なす善光摩音介よりして則ち返りしと親を  
拝公し

一念稱揚無息苗

何呪七日大功德

我待衆生心無間

汝能濟度豈不灌

八月十八日

善光

上宮太子御返教

又そとく之に於て

「待賀祿天恨都告与昏人亦何於何都天急伽佐  
苗良死

夕秋九十八

太子御返教

「急人弥吃乃神舟能通也耳乘後奈平謹渡渡可  
此念仏に功力よりして祖父欽明用明の二帝を尊ぶるを  
て不返しと云ふ 運位の御了り慈く要ふ事と云ふ  
と自法草を縁海に玉ひりり  
中二度の御使洲子丸に消息云

大慈大悲本誓願

愍念衆生如一子

是故方便從西方

誕生凡卅真正法

我身救世觀世音

定惠契女大勢至

生育我身大悲母

西方教主弥陀尊

真如真實本一歸

一歸現三同一心

陀域化縁亦已終

還皈西方我淨工

為度末世跡衆生 父母所生血肉身  
遺苗勝地此廟窟 三尊一席三尊位  
過去七佛法輪處 大乘相応功德地  
一度參詣離惡趣 決定往生極樂界  
法興元世二年 辛巳十二月十五日 厩戸勝鬘曼上  
如來御返報ニ

善哉ニ大菩薩埜 善哉ニ大安樂  
善哉ニ摩訶衍 善哉ニ大智惠

ト撰ニ御表書ニハ  
上宮救世大聖 御返事

第三度の依仗ニ甲斐黒木と洞子丸二人の黒木  
八軍の系洞子丸を究駁ニ系依清曼ニ云

白秋九十九

列城化縁度脱ニ 平等一子衆生界  
能除一切定業障 兆載永劫成菩提  
濟度群生同教躰 恒願本師如來因  
口稱誓願報持功 豈是固持不護念

法興元世二年 壬午八月十三日 厩戸勝鬘曼上

御表書ニハ  
進上本師如來御空前 班鳩厩戸上

汝是救世大聖尊 能度衆生濟如我  
父母所生引導身 一切有情同利益  
超世大願為過人 五逆重罪稱念者  
六万護念名号故 運心執持生安樂

八月十三日

赤讀善光

御表書より

大聖救世尊。御返夏。云々かろるや来二天四海  
又ありへいどありり。月教を則て来とすれは聖  
徳太子にては救世菩薩の化身中く凡人のふしひ  
くかかるへありさるの疑たり

清水の橋をわくる俗いあきらつ  
とすふかの清水納まの一条わねつ  
と書るころあり

あさむつや 月又ふ旅の明とふま

云考新水とも書り交細さともしれおり衣考集  
「おはらつのは」と書いておられともころしと

白秋百

たしむてわひくきくかのかの教つとりの深  
をとりて月又れ旅れおけをよまきと  
つとるころ

清水納まの一条あきむつと書きたれと今  
清水納まを又りにあきむつとをよまきと  
一条ありふま

湯尾峠

月小石をつつみかきつと泡瘡の神  
悪考湯尾峠と越若之峠れ染店と泡瘡の  
守れをゆり

湯尾峠御孫嫡子 ☆







一侍りぬかの日向の妻を  
切て序をまうけられしを  
今さしに申出さる

月さむとめ智く妻のをさしやむ

愚考明智光垂いす流信の御り毛利元就のち  
さるさしりりおかし指用よそそこのくせむま  
まをさしし事女思髪を切て後の便しして志をま  
りるを世良のほ切おむひくをささるものこ

正秀亭初命

月代也勝よま不ま宵おうち

古も就月

月乃ける。登に是しき教とち

白紙百之

一本教十たしとけけを非さうホ白のもさし  
才とのもさし牛の角るの角の付あを弱の才三  
子福業をすくると仕やう用もさし是くを付もさ  
いさくの志れかさし此のもさしとつくとさしハ  
たさくさし正侍を味たさしは改す下白のさハ  
加こち教する人斗とむさし

一書こ名目や序よらつくときか不さしと出さ  
あさ此やのさよさしりさし  
へ一まさしにさしは一回一矢百媚生六宮粉感無  
顔色よく此心よかさしりさく

愚考是ハ美人の許しして唯一人の媚も宮中教  
とさしとつとさしりさしはさしはさしはさし





釜魚雛鷹の然あく子一きき  
とせ治をいひて名園の衣を  
やふり杖を打て業を換、既し  
六十年のたしぬ市店を山居子  
かへて果心不や字ををふゆ以  
札をさしぬりすしをあらりき  
筆法すすい車よ六はるり  
こと一湖上よせりて未ゆは  
をそく、是かたうり大隠野  
の人ちるへ

八月 既ありとむ札の四隅の形

愚考本多京江州藤原の城をり所ふの区と凡

分秋百六

へきり京中かをて伝説と書へ一伝説とあれを  
何両又何人校持の不知かへ

令急籠鷹と蒙求曰後漢范滂字史雲臨苗外  
貴人受業通徑好遠時滂俗中略友を遊きて賣  
ト一有時絶粒山躬居自若園里歌之曰甌中生璧  
荒史雲釜中生魚ハ沈菜サ多ク切くる極多の慈  
ハかの伝説をいひて少くあり  
市店山居と子寧云中孝稼師の清流よ不ゆ  
車よ六はるりこと一は書よ苗る七の形よ五  
車の諺あり

大隠野の人のと大隠と市中よかへるの美く  
八月の跡と札の四隅の光よ細くといふ儀と源氏美



七款のあり探集抄よかきとめて後世のたゞ  
とふたふたれきり又分るは口つしよ白紙して感  
美ありし之見英僧教保元二年寂行六十年後  
建仁元年新古今集成西行上人之見英僧教  
四十七年のち建久九年寂行かく年代のつまひ  
たつては志系へ

月下に思をおくるといふ題を

月夜中孤情かる思此依

長柄垣おれ文基のうき書に

月の清るむらじ此欄の板目ぞ

思考名抄稿を撰我て皇弘仁三年抄州西々部  
の勅ふ仍てかふるん九百七十年よあるた今集

「よれ中よふてぬものかはる玉にたのり此稿と  
素とすのかり」

川喜や五條は月の古に

愚考川喜よて稿を中つてきりしめく五條稿と  
今此京の近郊の改よつて此稿を五年に後光  
明院正保年中石橋よれとてしる百余年より下  
寛文二年大抵書つてあつて今又板稿と  
月を思てしる此きりしるやするの秋

愚考此首は又文字原のよとして出れ此稿より  
月を思ても彼らの秋はさびしきはところかこち  
きりしるやするの秋を思ふもよるもよるこ  
源氏抄よて今首を名月とて「思てふ」と

志はしあつちをなくさるる月めりやこにたるこのちれ  
もととせしるるあつちをすひしにたかすしを  
そへて月を足てもたすかものせしるぬしをえせしる  
と億つくりせしるなり

高にひとら海よもむとら月見か  
悪考千載名茶一あまればほくそくゆく月とひとら  
りてやとくぬ水のいうてたすくむ此古歌よりぬへし  
よま一巻

赤名も四角を堀を窓に月  
悪考陸士衛、安海小巻上以月照我牖をすの付り  
字ふたしすめあつちをたすくふの月  
名月や雨は深川 偏うま

陰河のちる千酒奥一ふの月

其岸崎の人あつちよ三人あつち  
とふにたをふれて

盃よ三つ名をくむを雪か子  
をくと名月のたや茶一茶山

以上五白皆古酒く  
此義を悉時にを先して

政以去飲  
名月の出る市み十一條

悪考此義を悉時にを先して  
たしと先小條は市時政伴夏ゆくに小条に在て女子  
政子を執執るに味して執持職きくも二男義

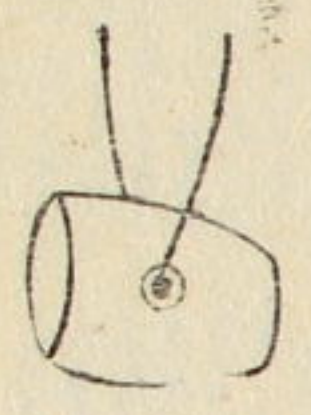
時實於日の執持職となるる是時の婦子恭時又至る  
 常樂と号し然るに成敷式日を任せて仁徳  
 を本とこり則ち十一條之式日を名月と見して  
 是を養するの方なりへし是又延室中の古細く  
 名月や北國日知りて其たよこし  
 又細道の云を書ふ八月十五日より之の十日とて  
 是のちりぬふるとあり

名月此ふきく有ても濃田の月  
 愚評此ふ文字名月や名月をたると出ればあり  
 しくやの名もこの字ふましく人さしはとててて小を  
 を免れまじりの。此字のまじりも皆あり  
 につても非なり望月の良友ありて大徳小徳の意

をりめり

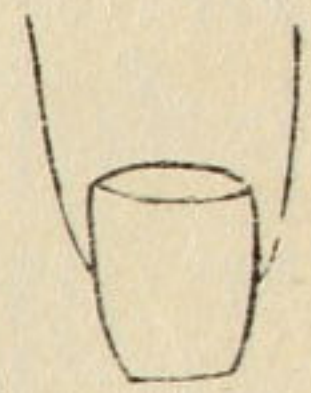
歌器の図に歌す

おとや身を おもへともひりしは月  
 愚考孔子觀魯桓公之廟有歌器問於守廟者曰  
 此謂何器對曰此蓋為宥坐之器孔子曰我同宥坐之  
 器者虛則歌中則正滿則覆明君以為至誠改常置之  
 坐側顧謂弟子曰試注水焉乃注之水中則正滿則覆  
 夫子喟然歎曰嗚呼夫物惡有滿而不覆者哉  
 歌器と元來一ツをれりも画くも三ツ並  
 て書なり。元は圖するあり



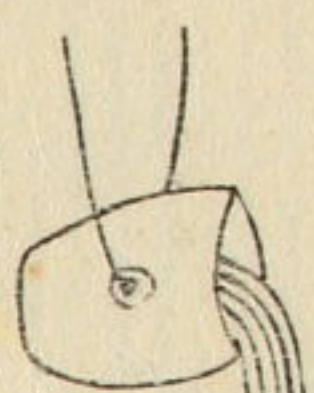
歌不以よちかくれり  
 △付賈と比す





水をよき水と入るれを初めと

△満月と比は



水満るときはかくれぬ

△既得と比す

水をよきと身をもそなたち水をよき水とよ入るるときは  
白く水もつる時をかききて後をも他がふ「おもひ  
みつてをやうてかく月はいささか中人の世の中

まかけて名月あつてすく子くま

愚考之限冬熱此初不知何夕遇涼風一寝室對月歎  
忘夏為我報秋床下與此詩此出言を共ふ後人は  
助けよ白れをこころも是に必定せりうこか  
へうん

名月比各所同を心旅 寐せ 夢

一書に鏡糸の等裁坊の鏡也

愚考官を心旅寐せむとたつこかけき。河又あふ  
くもふもをこけ

名月やたりの小波を鏡 此 夢

詩に朗詠の双落を茶室に夜半を月也上月明

時

愚考事文類聚曰露水也夜半水位感そそ氣  
則益喜鳴云「所よ夜半の夜半をさるといへり此も  
年の花よりして涙るをたりのにありは好くとす  
知つたる白くはとを好むをさく露もの方れを芙蓉之  
一筆兮知山川之新曲再卷兮知天地之圓方云々

十(五)をこそ驚愕于九臯声同于天是ホよてそ  
此(五)よりとあやしくもよくす知る意を悟る一  
衣月巾見きちちちふ堂此椽

月夜賦

六と一昆習伽の月みむとて志を  
らる本尊寺の藤原一て後不  
松本の人しを傳すよし別酒  
を授乃ていつと川よ三りの名を傳  
へ山秀の茶飲つみて伝来し  
一取代後をさ中今方茶と  
いひ酒といひ荷擔の人も二流小  
づりれて海堂ハ打よかくふきて

茶よ玉川の歌を詠一 文軒  
月小うそふきて其海は樂天の詩  
を吟詠支考ハよく本節ハ老僧  
月よこのお木つらあふかつきれあま  
此ふまうらひあはれそれの中よ  
物然法師ハ酒よおとろき茶の感  
一不心るも我一るも中よ以  
てあくにまき者の心をためさゆむ  
中す一てまきか我友といはる人も我  
洋くの心す一をまけつたす人  
ハ飲中ハ僊のあまひちかしく心議や  
つきくの法師たよあまらをつくら

とも友雅ひをわくる月足の位  
 なるやとおもひしきり此等の度  
 に浮世の外此の世を尋ねる  
 なく我友を去るは此月の  
 かくて三杯の無よ業一て湖  
 おれ月よ少きをうか座心とお  
 母人の風情を尋ねる林子  
 飄然と身を去るなりれと  
 扇上茶瓶此の男おもしろ赤  
 燈火をけしきりてあつためりて  
 なる知あはれ涙のなよおの清山六三

夕秋百十三

さしむらひ日枝を横川に移し  
 つつたてて比良のなる根を厂を  
 かま川原にうららまき羽の  
 峰さく石山のかまを粟津の  
 あししきえてそくと柳橋  
 此まも居ぬ心矢松の福帆を  
 決まぬをわたりて似きり  
 名月や湖氷よりうみせ小町  
 さしを我れ此紫式部を石山  
 に源氏の侍をうつて  
 の藤居士と西湖と裁女の上  
 そけいをたふしつてきり

雅名に流りていすは海不  
ろ一にうかききむや美  
し和漢名流をうりし  
さて松もとにふきをさし  
とせて茶店乃操干舟中  
流成をなてを目より  
蓬萊名流を厚くして  
身をたく美名流をう  
るはふ舟の林乃流し時  
たあしく松の江の釣を  
今うたをなやなをさか  
たふく月名流りよを

松もいとうやたてる古き名  
もゆかしく流を尾分川の四木  
をふるとよ尚白をかとろく  
また松をさや又更よ過ぬ  
三井寺の門たつらやりし  
まやとや推教はむうなかく  
今言はあそひをふへはは  
に韓愈文章をもあさむき賈  
鴻夕詩賦をもとくきぬへく  
文字よとなくかきぬをた  
赤松はあ後とりよもそ地  
ふれ人を恥へきやと見ぬ

をおもいにし、あまのいづれを  
あつとふほつとよ月を長等山の  
木はるよへぬ

思心考

いつく川よみくは名をつてへ 瓶れまうわきて流る  
いけみ川とよめるを瓶向し  
伝来よ一枚の葉をさますまうき燵の陶器あて  
存名茶を出んの地くかひくふゆ茶の背をとく  
系ゆ振の人も二旅よかまてとく茶を下戸ゆき上戸  
れちふ瓶等茶瓶に文ありゆのゆ文あり  
て茶に玉川く飲を誦し盧仝く唐の茶人よ玉川  
子と号りて茶に飲を事文類聚続集よ云日尚文

夕秋百十五

五陸正濃軍將打門驚周公曰云諫議送書信曰借料  
封三道印用絨宛見諫議面午月圓三百斤  
新年入山裏藝虫驚動春風起天子須當陽羨茶百  
中不散先開花仁風暗結珠琲現先春抽出黃金茶  
鮮焙せ方旋封畏至精至好且不奢至尊之餘合王公何  
事便到山人家柴門及園庭俗客紗帽篋頭自剪  
喫碧雲引凡吹不斷白花浮先凝鏡面一椀喉吻淨二  
椀破孤岡三椀搜枯腸唯有文字五千卷四椀發發轉  
汗平生不平竟尽向毛孔散五椀肌骨清六椀通仙  
灵七椀喫不得也唯覺兩腋習習清風生蓬萊山在何  
處玉仙子乘乘清風欲歸去山下群仙司下土地位清高  
隔風雨要得知百万億蒼生壽命墮在在顛岸受辛苦

便為陳議問蒼生到頭還得換息否

十酒小樂天在清在吟以事文才聚統集歡宴散  
白居易「小宴追涼散平橋步月迴笙歌歸院落灯火  
下三樓臺殘暑蟬催盡新秋」  
「廠帶來將何迎睡與臨  
卧拳殘盃」  
あつてよ酒茶の對を  
是皆月をして骨とけよく味ふへ

子海に樂天、詩を吟以事文才聚統集歡宴  
散白居易「小宴追涼散平橋步月迴笙歌歸院  
落灯火下三樓臺殘暑蟬催盡新秋」  
「廠帶來將何迎睡與臨  
卧拳殘盃」  
あつてよ酒茶の對を  
是皆月をして骨とけよく味ふへ

白秋百廿六

三子若の志をきめゆつて心や子寧云悦然三子孔  
子北遊東上農山子路子貢子新則從焉孔子曰  
歎曰登高望下使人心悲二三各言尔志立將  
聽之下略

我々、伴これ心さしを志れしとて事文才聚二  
呂氏春秋曰伯牙鼓琴鍾子期善聽之志在太山  
鍾子期曰善哉乎鼓琴峯如太山志在流水鍾  
子期曰善哉乎鼓琴洋洋乎若流水鍾子期死伯  
牙搗琴絕緒終身不復鼓琴

欣中、仙の抱ひたる心則賀知章汝錫三李適之  
崔宗之、沈黙晋李太白張旭、焦遂此八人の抱ひたる  
心、  
是れをよきとす

了りてちりしとこ  
つとこの法はしに心をつくらぬ友えりしを月  
尺の侘たるをやとハ徒然なるれうち小彼なれど  
「あゝしや車と野松の枝は形の地を足をおのつ  
らゝぬものなきを  
一書に「さしくはに益者三友す一は米くす一友  
それを用尺の貴家くはるまじり  
杖は瓢箪に鹿子なるれと鹿子茶瓶の表  
男あはれとち子寧云赤壁たるを杖は瓢箪  
を括りつけざるをさき子々持きくは必定く  
るさハ鹿のこも茶瓶はあふきをきしてあふき  
さるる茶瓶あはれを不自由とちりしとく云く

白秋百廿七

赤壁の母れと不きとあふきめり赤壁は後録  
賦は東坡の依たり前賦は吾と子魚推於江渚  
上侶魚蝦而友麋鹿「洗盞更酌看孩既尽杯盤  
狼藉△後賦は歎曰有客無酒有酒無肴月白風  
清如此良夜何客曰今者薄暮拳綱得魚巨口  
細鱗状如松江之鮎顧安処得酒乎歸而謀諸婦  
婦曰我有斗酒藏之久矣以待子不時之需於是携  
酒占魚後遊於赤壁之下き、  
かく七のには「はしきよ此あふき小乙州酒正秀乃茶  
連中よ酒堂丈中支考水節智月惟蛇の紫皆磨く  
此驛客あふきと自負す  
石山の濤も粟津は嵐よさえてそこに楓檜の雲おし







論錢買來玉尺如何經請出浪校直是圓白貨  
 四點細鱗巨口一雙鮮秋風想見真風味祇是春風已過  
 然此情此味長苦風味味をみて今もさるるをさるるを志  
 をりたり是酒者れ對白さるるを新魚も後赤孫賦は  
 又へりり杉江も吳國の地さるり  
 古き郡屋花川志賀の郡もあまふを昔さるると  
 せめる天龍寺皇居れ跡をいふさるる尾花川田取よる  
 三井寺門たるるを  
 一書よ賈嶋の詩よ鳥宿池中樹僧敲月下門諸注皆  
 同  
 愚評さるるを彼所の象をさくして志れりといふ  
 論よひとくくしてさるるにさるるにさるるにさるるにさるるに

白秋百二十一

へきも此三井寺之ありを御井といふ由來ハ天智帝  
 精水天武帝濟水持統帝萃水三天子の産湯を汲  
 井あり後よ三井と改むかの樹よ常り一をのかけれ  
 井ようつくくはるる三井も此門をたて御井を配  
 るむとの料さるり  
 玉るるをさるる道修「ゆれた心の志よ此れさるる三井の  
 後ありさるる月かり  
 韓愈の文章をさるるあさむきとさるるあさむきとさるる韓愈  
 字退之鄧州南陽人よして文章の名さるる全唐文  
 をさるるよ文章れ多きと白樂天韓退之柳宗元れ  
 三傳さるるれもさるる韓柳の二家も胸れたの名  
 家よて韓柳文此兩集ありてせよはるるを柳文

韓文の上より主むるがごとく韓愈の文章をさへ  
 亦々々々々と自負する者あり  
 賈嶋々詩賦をもさしきぬへきとて他人をえり  
 たり三井さの一句も僅十七文ゆふれとも賈嶋の  
 詩くくくもさつ味海しと自負する者あり  
 未辨のその後とりふとも我より他人を恥へきやと藤原  
 俊成等も前後ともに唐人教に人のくくくもさつ人  
 平舟の指ひくく人教のおもきとも自負する者あり  
 長等山も三井さより北へ往く長等山圍城ると号  
 天智天皇天武天皇持統天皇三代御領に草創に  
 して教待和尚建立く寺領四千八百石之十之五のれ  
 所にしていふべき最貴者くくくや十度の塔上よりく

白秋百廿一

從古の姿もこうせよりり  
 名月や我も更毎いつちまゝ  
 悪考「おもつ」くくくつれをやうするかく月  
 のいれよふや人れ世の中此言を牙の上  
 子引うけての親想をり  
 名月や新脛さるき遠千沼  
 本を伐てもとくちえをやふの月  
 名月や我も草架の 園 雨  
 名月や系家へちる門流坊  
 名月や門はれし來ふは  
 胡蝶云玉昌齡之詩は映門淮水綠笛騎主  
 人心明月隨良採春潮夜は深き

何處も皆かきつきて稀  
 跡る家も門も字も消けて  
 寂しきけしよもさう  
 松海茅も原  
 香はふしとあれも  
 虫のさし  
 うらうら  
 芙蓉紫系糸の地を  
 成にさう今うさ  
 名の跡も  
 大  
 宮をうさ  
 名月や沈をぬく  
 一書此句を詞す  
 一扱の佳無  
 みる心やう  
 もとめ詩を  
 一書  
 一扱  
 一説

名月百二十二



かくくく池も水を  
 ひき下も  
 一書  
 一扱  
 一説

説をかきつるを以てしるべきは他をまわて海川の  
右池と一途と思ひておぼし教をさしけり此の  
初一人の眼をみて老にかゝる清のさるるか  
白者たるを多しとて是を思ふべきは其の  
そとく此の三字は傳とりしるすあり多し思ひ  
を思ひていへども其を以て一日柳亭氏に違ふ  
折かゝる此の教を傳へし柳亭云我は徳撰の  
集あり橋南と号しるなり此の河書ありと  
並に柳亭に入つる衣は書を一巻のくく右の  
此の教あり如徳撰の心地して其の合を忘  
て考ふるに彼古の二字に心自てありたれ  
小とて是の此の字を以て是を以て教の

白秋百廿三

たちやち阿鑿<sup>三</sup>呼<sup>三</sup>れ三字を以てしるす  
も密宗の秘法にして弘法大師三徳を以てし  
列の徳の他教の徳と号しるす三徳と号し  
て三教指帰を著しし三教ハ教老孔の三徳に  
して後因の道安唐の法雲廬州の姚聖等の  
教書ありしを以て大師を合して三教指帰を著  
し親識の誑誘をふせき且も復錫の昏荒を  
箴す云々  
あま道にわたりて其文類聚曰儒謂之世親謂之劫道  
謂之塵云々是又三字にして教老孔の三徳と  
しるすを以て阿婆呼れ三字を以てしるす  
世切塵此三字の義記ありしは三字の代りありす





天立寺子又る時を門を子保りて夜上あ  
をけり此詞書子叶を以

際なる此書ぬふ所をあさのそ解

愚考ふと一多探名の志ぬとりよるやある  
されんを名月の限一詞にて極ふすなり  
良叔の月也花は終るも七部大境よあま  
けり見合すなり

名月の花々々々て棉をこけ

名月よふもとの志ぬ回のくもり

續猿の解よ愛一

十六板もやうて更科の那り那

愚考らなくの人まじはるすなを那りと冷す

名月百二十

一本にまゝとむれを非く 煥於此月を良叔  
又て更科に戸をたへおこむ同部より長を名  
さくまゝとらふなり 煥於此月を更科より水  
内歌善光寺へまゝて、まじはるもに更科歌へ  
し通して止宿をたれを教とてつるなりしと  
まじはると考へるも、まじはるを祖翁の本意を失ふ事  
ハ暢に里より善光寺へ通四里多れより、まじは  
りて又更科歌より止宿をたれを、まじはるに又と歌をま  
まじはるてまじはるなり

あはれ候よこす

十六板也海を 煮了 粥の方の等  
一書より魏志より南海中より書日書て一平の









て姑蘇城に於て清く坐す

鑑 鳴る月 出る入上 浮 御 堂

是考 何れ一成秀 字本を以て 榻を之に玉篇二曰

床 狭して長し 則腰かけたり 軀體に切目さす

目さす かくさす 乃をくす 乃と云々 仲殊 予を此日ハ月 浮出堂に 羨仰ふを 澹山と云

と云々 澹山号 海月山 満月寺と云 浮出堂よ 了了 乃を三上山 水蓋山に 乃を澹山と云 外の 數

三竿と云 一丈二尺六寸あり 竿を長四尺二寸をり 三竿 合了日 如洞 乃を二尋 乃をさす

白秋百正九

わく 中 乃ハ 西上人 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ

乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ

乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ

乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ

乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ

乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ

乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ

乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ

乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ

乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ

乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ 乃ハ

因起紡惶詠左思招隱寺詩忽憶戴安道時戴  
 在剡溪即便夜乘輕船就戴經宿方至既造門  
 不前便還人問其故王曰吾本乘興而行興盡而  
 返何必見安道耶  
 橫川多比良橫川とつきて望田れ正西すり  
 姑蘇城外水清もを張繼の詩は月落烏啼霜滿  
 天江楓漁火對愁眠姑蘇城外寒山寺夜半鐘  
 声到客船則拂曉れ付をいふなり夜半鐘声  
 は後夜よりあり候上ると同事よて秋の悲情  
 をいふ淡明りてとを良夜より定めて満月を  
 入て々宵ハ戸たれんや心は卒今宵もと願  
 ふ方々へ

台秋百三十一

いささかいもたつらに雲をたつた  
 悪考此皆たしめ々西の初としてさし先か  
 と再案あり  
 やれし中かていささか月夜中  
 計三や肩に揺らつたつた  
 榊亭之延室三年五十番台合よつた  
 近江路をう困ふふ日神山の  
 道より胡天といふふの上よ乃  
 衣をとりてさく  
 利れ出ると身よを砥れひきき  
 考事文類聚曰星之為言精也陽之榮也

陽精為日日分為星故其字日生為星云々  
北斗七星第一天杓第二旋為魁第三機身四權第五  
衡第六開陽搖光才一至四合為斗居陰布陽故稱  
北云々白樂天北斗星前換旗幟南樓月下掃寒衣  
かよひ此侍の如かり

言聖のく武坊より一板をかきて

信亦く武坊より一板をかきて 妻

武堂云かたり一海陽北のちよりして乐天を信  
一あるも高人の妻はあやうなりけや坊々妻の石  
ハいよあていぬをなくさぬ一も物とくにやうか  
くれそ色え江のけりつ是ハ武坊坊地をかきふ  
くしゆくくえりくむと云と

【白秋百三十一】

一書はみよ一山の新風さよふけてふるき。字々  
夜らうちらと誤は見をよておとけ  
悪考典ふを夜らうちをよとせよとせよとせよ  
斗さうちらとせよとせよとせよとせよとせよ  
字眼さるは必琵琶也の撰字多態と終れまし  
その終りハ琵琶をあらを一宮よと妻を体と  
して結ぶ代ふる皆是もよおたな一  
事文類聚曰琵琶行白居易 元和十年予左遷九  
江郡司馬明年秋送客湓浦口有船中夜彈琵琶  
瑟者聽其音錦々然有京都声向其人本長安娼女嘗  
學琵琶於穆曹二善才年長色衰委身為費人  
婦遂命酒使快彈教一曲罷憫然自叙少小時

歡樂夏今漂淪憔悴溥後於江湖間予出官二年  
怡然自安感斯人言是夕始覺有迂謫意因誦長  
句數以賜之凡六百二十二言命曰琵琶行  
浔陽江頭夜送客楓葉荻花秋索々主人下馬客  
在船奉酒欲飲無管弦下略々  
撥引之祖の小袖をきめりいふ歌  
鬼灯も実も葉もかきも紅葉也  
一言に万葉一橋を築き人必之を以て実也一枝の  
葉おけ葉を墜し見む此意をもて鬼灯の  
中にもふせりたるやとて  
愚考予橋を奪胎換骨したるより鬼灯も  
のまじり字大切之橋も多葉もて鬼灯の  
る秋百三十二

紅葉するといふ異別此をなかり此古をな  
くして唯の白さるハ鬼灯のともゆる定法なり  
くす〜何かり〜像に  
む〜雨を春中に負ふて柴胡塘  
詠う烟を木棉た〜秋紅葉雨  
古す〜中へ〜に志とらにふ〜て〜を〜なる  
か〜か〜を〜結も〜〜に〜を〜なり  
江陰紅葉あり〜やす〜む不ニ秋也  
愚考江陰の魚ハ鯢鱉鱉水蛙の書方あり古  
子曰江湖中にあり俗説一富士ハ湖よりぬけ  
るといへるか〜〜不ニりぬ〜あり〜やす〜むと〜  
鐘る比新見む笑のや〜〜







莫女は女に似して道草の朝り二百に十年と  
絶て古中ま陽る心は流女一ツれ玉の糸を授け  
は糸をひくくつりたるの道とほく割いてあたるを  
たのひてひくげを忽白糸友の糸とぬくとく、

善母比贊

兼好のころは都大かえよとて  
乃教をとりて仕さるる法師か

車庸亭

秋の夜をうち響くきく新秋  
胡蝶之笈日記に此白ハ寂莫枯稿の場を踏やうな  
老後の活斗おもれぬ及ひんをむと名感一ハあ  
ひぬ源氏に花菱里の巻におる、これ世に志さる

百秋百十五

もれをれをむかひつるかきくつりす人かま  
く成ゆくうく又月石れ老にやうきくをまぬ  
世のうらむももぬいてくすゆると見へるか  
もそつりひくくつりぬるぬかおれぬ  
中七文をよめなきつりす下ふ文字へもつり双  
れ白法と又え波うすもれ記もいもあつりきぬ  
語りしてる能のるもをくつり知るかとて

曲盤山亭

入野下焚きくつる板さかた

一本は乳麩と書きた非ちあ或もつり入打入すき  
るのり字こ

一六勅六云糸のふりりに奔を

訪して古の安否をきく  
業ふ可へ半らおもひやあきの暮  
思業きつた冥途もあや秋れ暮  
延寶天和の右洞さう

大垣にとりかへてくる船を木園り  
東をさへ守む出づる時  
帰さるる心をおもひて旅立  
けしむ

死もせぬ旅路のちとよ秋れと雲  
野水の旅行を遠る  
足送りたうらや寂し暮の暮  
船渡の尻あうきくわたのく

石秋百廿六

枯枝に鳥のこもりり秋乃暮  
此も七絶大後およひ俳論活字に中  
秋れ暮 男とさうめものさうハこそ

これ兼門下行自多れ像も  
あしむあそびの方にもり向  
まじり 活字を画て見よ 楚をよ  
よすしれりさハキくそ六十平  
あま十に通しとむにさ中よりて  
そ及れ形をさあすしけはそを  
あしむに戯言をもてす

とちりもけ我もさうき秋のくは  
五考北の雲竹と相公のま本の海匠とて能書

此寺にありての画も無く見及なり

京教清ありて泥足る集れ能  
高僧子しりとも新思

曲和琴子に逢へりて

叶くは和仍人すしに秋のときは  
思業すした九月五日曲りぬより逢へりて  
の志をりともさるるのさるる一は同丁  
月十二日人坂よわいて没故に何れも終るる  
るるをれをたふすをさるる逢わして高僧を叩く  
よきした寺にふつた  
有條之取違り秋日此清ふ返喚入園蒼古道少

白秋百三十七

人行此外諸抄此解皆ありてさるる記され  
人夢や未ださるるかへりて秋のとき  
一たしを此台仍人すしに此より先上出りて同所の  
吟を

女丈麻や毛に色り持ふて毛むつり  
むさしはや一寸ありて麻のこしき  
二台とりに寛文延宝此吟をり

男麻山

ひくはさるる女麻もよる和男麻山

柳真を男麻山と曼州の地をを古綱より

山の中より

湯に名跡たしむる肌の手がむ  
柳亭云此の芭蕉翁山中居居れと手大書の  
う柳文に書てあつと云り

兔苓父に別墅まらく志つて  
て筆や数株の木まよふ心  
二分一々受田所敷り守保亭  
うううう

祖父と親友の子に庭や柳密栞  
松柳やひくくちらとくう様れ面

予のあま亭

雲ふりて柳の本もくみあはさ  
是ハ伊賀の行路とよまの門人くう

幼ぼ蒼して李由去来に對す

菟菟と柳とくうれきそのれく庵

愚考はあやうく迎への名物さう受田の李由  
う對は柳に嶮我れ落柳舎去来に對はるの  
えくう

秋風の吹けともさう栗れいの

一言に云傳正齋昭言「やの意を松を附雨の際  
多そさ高きうにほさうくもり此くりのいの  
のむくつけきたつきさうき安ら及て面か  
愚考は葛ヶ原れす大傳正齋系のすさう  
あうき益詰此をよむかうくもれ傳さうと  
浮れさうは試よるの影をきしてすうやや

凡心よりいふはすも此の如く一とありて則敵山  
さしとて意を以てをさされしれをさすも  
とていふもは 雪ふりて牙を引るるをいふも  
たふさすの羽をさすもいふも といふも  
感謝の言人の言するの所を志るといふは  
とていふもは 意の秘するをいふも  
客をかくやんくといふもいふも  
僧ふもいふもいふも人より見し  
さしとていふも 佛の言するをいふも  
一人といふもいふもいふも  
也志すといふもいふもいふも  
あつともいふもいふもいふも

よ不教素とモリ法及皆かくれこと一書れを  
からにいていふもいふもいふも  
亦若れ縁なき世の人をいふも  
一書し縁に亦若れ山陰く谷くろくしておのつ  
から市をいふもいふもいふも  
了道心の人く多しといふもいふも  
ちかゝる晋執事虞入南山臥甚拾掾實而食  
又杜甫の詩小歳収掾實随狙公  
一書し祖徠先生峽中記に治上に曝せる掾実を  
乞ひて東都純縉子に及やけせむといふも  
不圖是をいふもいふもいふも  
とくといふもいふも

如水別墅

心流り居るも本寧をなま捨てるや  
愚考 莊子に曰果哉有理聖人遭之而不遠  
果ハ亦なきと云ふ所も中人の寧さうけのよき  
走つてふは聖賢れ教をよきとて境界を云  
たり早とてくも怪くそへり昭宣公も菓  
なかりて必以て年北流つ稿よほくをそ  
あやうくつて此れ法匠略しぬぬ水も  
流す大坂の門人なり  
秋の風もさめぬも葉の霜  
秋の風もさめぬも葉の霜  
露一々夕食ニ結葉もは落英なり

今秋百四十

落英一始英なりとてわらわの心を記す  
ふしむるもは落葉の此葉のちをなまはれよ  
と観しゆふなり

孟 既下也 ちや 朽 木 孟

孟 山 路 の 牙 ぐ と 是 を 不 寸

笠田をたれ瑞禪寺なり

朝茶のむ借勢すり葉の花

そよ風の雨

起 ち り け 菊 不 比 ち ち り ち の 跡

愚考 葉ち仁徳天皇七十三年大夜とて  
ちりめちち出せぬと云く又言鹿おち稿の

株とて自然とせし半しりと云  
陸佃得雅曰作芍鞠從鞠鞠之窮也月令曰  
九月菊有黃花至此而窮盡故謂之鞠云

た柳亭

を早く咲け九日も近し宿の菊

袖日記に古柳と出れを非たり

左柳さふとと陶淵明の五柳と菜と成かけ

合やとて七部系と左柳とあり

胡蝶云杜南の詩に簾幕甘菊移時晚青

葉采守理不地梅有日蕭條盡醉醒残花

探櫻雨何益とのあちをいふたり

咲乱れ山路の菊を然電也

一書に此句を松山に數千の行をいふと未だた

を山路菜の行をいふと何れも山路の

菜の行をいふと何れも山路の

小海の強傳ひして加州山中の

温泉に浴すも功有馬に次里

人りの此はも枝葉三つの名場

の其一つなりよこらに俗をい

るよあちをいふれを皮肉に

不ひ筋骨よまをいふて心非

ゆるく極よ氣色もとの輝

公地に彼松原よおれい

急きまの枝折もあす

山中菊も手折ぬ湯の白ひ

東野志話云山中の湯紫雲湯と云白湯湯  
と云り不背長の何某此所より病を治す  
白湯をけをひきして其病愈るると云く  
日記より見ゆ

一書云張鼎志云菊曰延壽客

列仙傳云彭祖服菊長壽其年七百餘歲云  
惡者然湯を上げ其湯拾有馬を名  
言一山中も其之と此外無所を宮と云  
名湯と云り其湯を拾有馬を名  
ありぬ

晋書秋百四十二

柳源云晋書云一と桃花行陶渊明晋太元  
中武陵人仲夏為業綠溪行忘路之遠近忽逢  
桃花林夾岸數百步中無雜樹芳華鮮美落  
英續續流人甚矣之復前行欲窮其林林  
尽水源得一山有山口曰鬢若有一光捨船從  
口入初極狹終通人 既出得其船便扶而  
向路慶志之及郡丁詣太守說如此太守  
即遣之隨其往尋向所誌遂迷不復得路  
南陽劉子驥高尚士也聞之欣然親往未果  
尋病歿後遂無問津者  
是と茶の札をさけては入晋太元



凡八百八十年すなり桃花の争きなり余亦まき  
る有る柳系派と云世年の事すれた命をく  
して争くや也それを葉の彭祖にかけ合  
やしてふもいさなり

木岡亭

かくき家や月と葉とよ田三反

一書云一休様所一山あり上田三反味  
八斗小者一人より所是等の侍なり  
悪考一坪を一步して三十歩を一畝と云三十畝  
を一畝と云されを隠者の扱持より是なり  
免しなり

如行亭

白秋百四三

やせさうりつわアアア葉の答が

本同如のつ道も美徳の門人なり

葉六家よりてひろへるぬりこが

胡切云葉を葉の白法なりなり文徳

又予葉を編幅にしてもゆる方たまきと

あつちと白もぬりこの答てひろへる葉の

家ともなる取も志のつふ

見とこの路のあまや路分の跡に葉

田家とやとて

新板に燈もめてきり葉の系

是の鄰縣の葉を本もひとせておかし  
之つ橋くを燈に長妻のさるるを葉の志とて

やをぬりむと瓶一そりてあり

松田の何うー木既馬沙の

先の亭よまもりの瓶一よ

うつゝ茶をたたく酒をも

てさききれゆるお茶葉ハ珍の

うらら菊の花の勝いと芳し

けしき丸

葉もも来て 瓶を鳴る茶の勝ぐ

愚考ハ珍とりやと古きをまうて 後世の

ハ珍と絲すゝ 竜肝 鳳髓 兔胎 熊掌

豹炙 豹蹄 狸脊 鯉尾 心とすうや茶の

ハ珍と絲すゝもれ考

或人城の来て 勝の瓶をみよとゆふまいの

まゝるゝもやえまぢりゝと新けりまて云す

もまゝあゝとあゝとゆふまいのまゝも

アゝとるゝまゝあり 圓機活法よ白進士段碩常

識 南孝廉善飲繪如穀絲綫輕可吹起操

刀響音捷若合節奏固會客榭枝先起魚架

之忽暴風雷雨震一声繪卷化為胡蝶飛

去矣南孝廉恐怖折刀誓不復作

もーや足等よりおしひおてる白紙もとのまゝ

むらと個色すゝれ

おふーも瓶よまゝ茶の菘うま

愚考魚肉と香と書茶葉のさうの瓶を菘

と書す人て精進も此ハ歎と書す志のり  
繪ハ精進を以て勝と書す志のり

九月九日乙卯ハ一樽を頼る

へきりりりり

くはれ戸や日る多し異ハ菊の酒

愚考事文類聚ハ曰九月九日吾酒坐難逢  
叢中把菊時ハ王弘酒を送り來り此後衆  
求も教く亦ハ是陶淵明ハ債さり  
酒ハ聖賢の名とて魏太祖時禁酒人竊飲之  
故難言酒以白酒為聖人清酒為賢人云々

岱水亭

新傳や葉の香はすく重高亭

一旬秋百四十五

愚考事文類聚ハ曰九月九日吾酒坐難逢  
叢中把菊時ハ王弘酒を送り來り此後衆  
求も教く亦ハ是陶淵明ハ債さり  
酒ハ聖賢の名とて魏太祖時禁酒人竊飲之  
故難言酒以白酒為聖人清酒為賢人云々

ハ丁塔云々

愚考事文類聚ハ曰九月九日吾酒坐難逢

叢中把菊時ハ王弘酒を送り來り此後衆  
求も教く亦ハ是陶淵明ハ債さり  
酒ハ聖賢の名とて魏太祖時禁酒人竊飲之  
故難言酒以白酒為聖人清酒為賢人云々

それを見てもすまじい目書を書いたとて白を掛  
集まらぬやうな事ある

大門通をくまき

素う若や古物店に皆戸の業

悪考大門通とつとむじうとと薩系とてあり  
左薩系と書しを文字にめつていれをて  
吉原とありしむを長に改めると宮のまき  
傾城町とてよく二町三町に分あたうとて中  
糶早八丁目淺念川山岸糶登橋古橋の内通三橋  
をくまきと二三十町とありしを傾城をとお  
浅の上は新中とて元和三年元薩系より二丁四方  
に傾城所済免あり吉原町と名をよむとて

白秋百廿二

此作付道之橋のまのまに戸町と名付同式丁目々  
淺念川岸のまき京町と稱町のまのま元來京町  
とて計數ありしとてのまのまに名付同式丁目々  
を改め京町とてのまのまに名付同式丁目々  
伏見町の元來伏見とてのまのまに名付同式丁目々  
とて京橋の角とてのまのまに名付同式丁目々  
とて寛永三年廓令く改稱されしとて京町とて  
お成り月明曆二年を二丁目とて三丁目とて今  
の京町系へ訛習は作付し後揚屋早付とて  
橋まの町号を分るしとて大門のまのまを區志  
に外系ある及ひ淺念川内入る事をはゆるし  
それとて江戸中かく一賣女一流お止り

おとめ暦二年より此<sup>元禄</sup>までやうく二十九年の  
事よりいふに全盛なる名妓の競ひし事う笑はるる  
彼古物語よりありて全まつて覺古の意もあり  
つゝをそはの妻よりおもひおいて菊とありら  
るゝはさき此よりありし中の妻より人たして  
明茶のあやうきをわうつり星かたるる事このまき  
を妻よりつゝて支吉原の侍れ志としくはやく  
も中しく此意をもて揮すへかしく

菊を女り 亭より

あつ葉の目よ立て見る 簾もさへ

愚考西上人「くもアたまきかつ見のうへよのるる  
れ目よきてる世とおもふも中興かのみは

かゝるへきみや

南都より

菊に香や奈良よとふるき佛造

愚考葉のふなれた一匝のおもむきよを菊の香  
やとあつるを貴族の香より一通りよとあつる  
奈良の大佛より人皇四十五代聖武帝に依り  
さう天平十五年に忍位樂まで造立し同十七  
年南都よりついで佛原を國公齋よりそは  
春日といふ佛所あり河内を妻日村の人さう  
名を禪文會就主熱の兄よりさうして後五十  
四代仁明天皇をいめて葉ををいへりまは上  
せよふ原よりふるる古き佛造とせし

二菊をとりしよりありて一と貴殿すと云  
えりしよりそふかきりしと云ぬ運米法交  
の佛工教しあり

ましく此書や奈るを幾代の男  
此白もすこしをふくめりし

くかて了る

業一此書のくかて了る旨の

くかて了る津の玉是より大坂御城見ゆ

菊よ出て奈良と難波を夕月と

野坡の初候よ此白首より難波互殿といひつる

おもしろたよりありて諸徳精例の法よりと云

此書といふの直書よりと云はるへ答へかく評判し

白秋五八

つるすり世彼の劫へよおとせぬと見へり

康この金花傳よ此難略と云難をとりをなして用

いふより業の白ひ月の光も速れしと云ふと難波

の古教を新しと云ふと奈るの菊をえて難波よ

夕ア此白をえりしより事く道後一日を奈良との

れ字よ此字と見るとへいし此徳おし候くの解

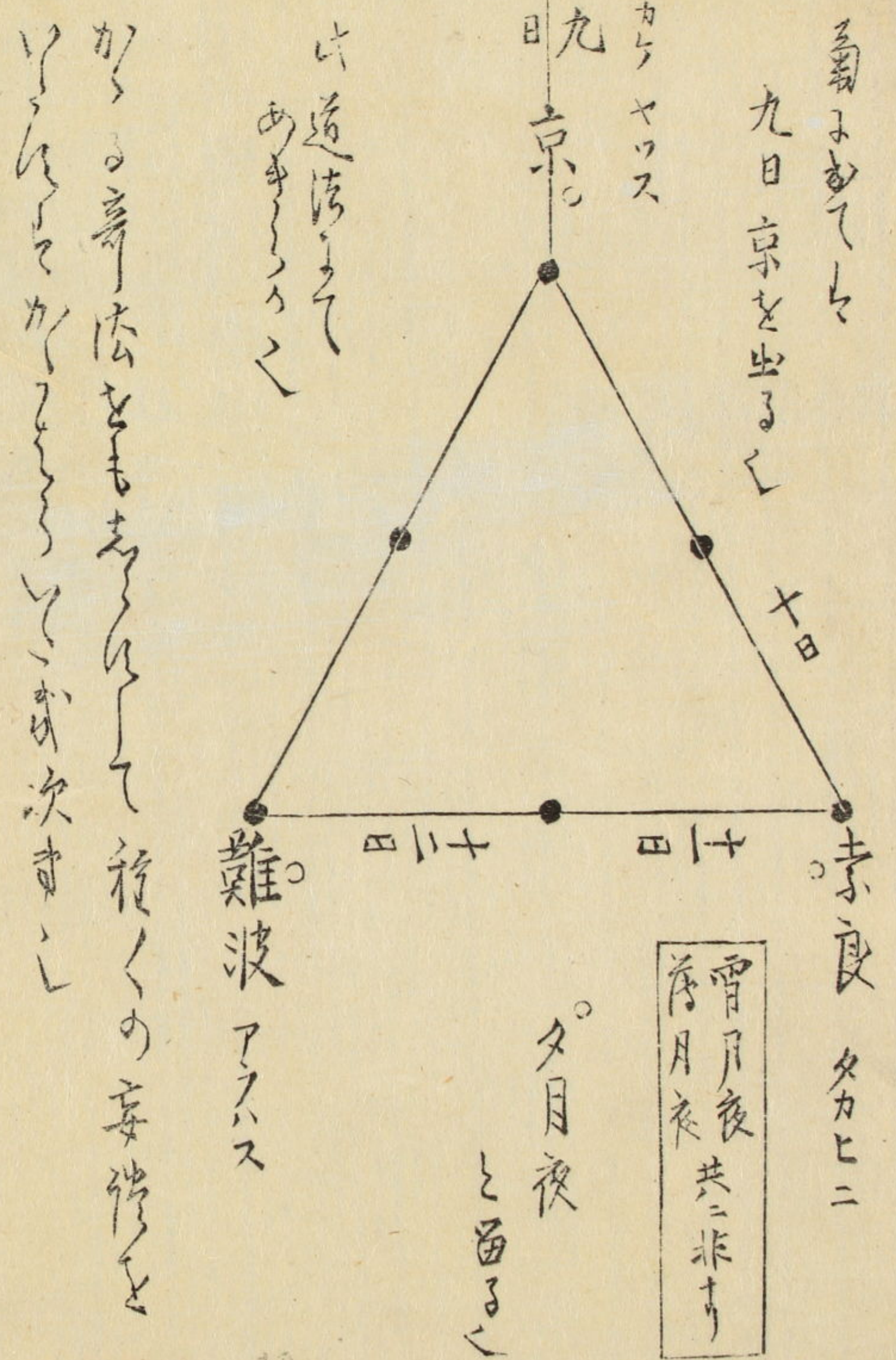
ありといへりし全体難略互殿の法をえりし

よ難略しと云ふたふす

悪考此法を能論信よと云ふしと出つれと云ふ

初公の為よたよ思ひ。康子解もなす

カケ ヤッス タカイ アラハス  
影 略 互 顯



かゝる事法をもあきくくして種々の妄信を  
 いふはかゝるくくくくくくくくくくくく

菊よ出て九日に京城おと見新を照らす方右  
 此三ヶまも鼎足のため此道法をれをふふ  
 難波をもて互に京をあつたはなり此方為  
 月夜宵月夜ときよ入て既了をれをたを  
 一宵月と夜よ入て既了をれをたを  
 一宵月と夜よ入て既了をれをたを  
 の夕月夜と云ふ  
 竟孝極明抄に十日ありて此以来ても  
 天に出入るはとも月夜夕月夜と云ふ  
 一宵月と云ふはこれより五日此以後夕月夜  
 一宵月と云ふはこれより五日此以後夕月夜

と云ふ中、此夕月夜にあつたむを互願此  
流をすあはもて志すめややとて若月寄  
月かときさくに論を―叔此句は袖日記  
れ取成ていせしうきふ辨波を遍歴―  
た中より成に寄す、迷ひを生じしと云へ、  
か孫てしう通う菊に出てもは系とありす  
―ていつこさうもをへても系に心を至て  
は海は年までもおもひゆくは是詩歌連  
俳風、將の事さうか乃あは代多し、代系を  
唯やふしと清負ううと系とありせしと  
いとけしと明くくすへて袖日記は書々  
杜撰多し、煙ヶ城は義仲は白道を築き

ワノ秋百五十一

をいらにかけると白き糸謬妄おほく―て  
初心はまゝひれた手さうきんをこそ悪く書  
を信じてるも書まきうと―といふ守やま  
かくいふとて予々著しと、此の世経解も於  
をく吟味して美吾を紅く後にほめしるも  
類も勝手次第にすへ―  
叔野坡の錯綜格倒の法さうとのふもあはぬ  
論く錯綜格倒は和歌一そあるはへ―十二月  
不考の歌に十月は考  
夕日かけあはきうふ田をれさしなす  
―と流の雲に山めとるを歌  
傳ふ曰二三四二五の法さう夕日かけさしなす





覺下略是と九月九日け白を十りの宴あり  
杜甫の詩明年此會知誰健が達てりふ通り  
小町業ま死回る飲の奪胎換骨さあ世に唯  
換骨とくおそりゆをけ言さる詩又もや上飲  
りしやく古人の胎を奪て骨を換るは法  
なきをたすく摸寫夏態とく大にお遠やり  
夏文の袋に東坡長短句云。そ情汁水自東  
流に載一船懸眼一向西州張文潛詩云亭々  
画騎繫春潭唯待行人酒羊碑不管凋波与凡  
雨載二將離恨過江南とく王平甫漏之此奪胎  
換骨法也 是別胎を一つとく骨とけりる雨々  
換るよとてとるへ

小町東集に業平歌言了いてく河舟の漕  
とき息しの勢にありとつて小町は飲きぬ  
のを代部とてさうきもたはいつて力をきく  
中ら骨乃漕又骨を奪はあしと秋の夕アと  
いつて又骨を奪一人の玉つさくさうふち  
志と骨とを奪て二十二種敷くさあぬれを  
奪りてにあり種はきく人持子と秋のねと  
さあのかさきやと骨を奪く此句も十言取と  
十日と流る菊とつて是の古きまきやと骨を  
奪く此格敷くあるも死なれを心付て死  
下と業平歌の骨も好き。和歌拾ひ  
迄て仍るまといへとも骨を奪りて

ほとりあてぬ聲

葉はくち大松の介さうにさ  
一書に云不現花中偏北葉此各開後更花といふ  
心にかたへううの結の余情おもひ合はく  
夏考袖日記にちやの終に世に非すう葉は  
万葉万本云ましく大松の葉はくまけやふに月  
半りも代一をいなり一年にかけてあつた  
たもあるへりれくもやあまを又多仙山茶花を  
結まら葉枇杷まもあまを唯秋の心細けき  
こころをうもて一白とすう大松の白を  
変してあつたと知るべし  
再考或もの云有さる知の終の二白を唐紙

夕秋百九十三

え復う時より或郷不現花中偏北葉此花実後更  
花と考して感歎して在りれく忽と一  
人あつて云ははまの人の此花開後更花と意  
多推す此花や後更葉とすうと中は誰  
人そと名あれたるを是れと云てかきけす  
やうに笑よりうとされも一字にあやうて  
るはの遠く変して開了後了るはか  
りて後上冠定せり  
又云余は葉をさるてあつた後と傳へる葉は  
ちりぬればあれたるをうと云はるは  
まもとてこれにあつたはるはるもあつた  
文に葉は正忠の菊序に菊之葉也既言白は

之不同而花有落者有不落者蓋花辨倍密者不  
落盛開之後淺黃者轉白而白色者漸轉紅枯干  
枝上花卉枝疎者多落下略寸又亦有ものり葡萄  
葉とりのり葡萄の葉の縁は毛を脱す（か）は  
葉は葉名をとりてけり一葉名酒とありたりを  
りれておろしよ開たれはよく

芝松亭

秋ふの葉 陣と何をする人そ  
此は此の解もあはと何とて孫をかきておさ  
つたつともあきつたつとつて思ひの秋  
かの炭俵の中俵の向う枝干とあり思ひの秋  
とも似しつて

下戸 此の月とむき池田の月枝が  
十三夜 此の月とむき池田の月枝が

仲秋の月とむき 此の月とむき  
持山ゆたくとさめか下をわ  
たむきの目とむき  
とや十三夜とむき

木とむきや勢もやうとむき  
十三夜石山とむき  
橋とむきとむき 乃名跡とむき  
佐吉の市にむき

非買てふかかはる月 又あ耶  
一書に花子と斗辯成而天下人始争是亦よけり

非買ふてちおとかる下はおもひ頂士れを分のか  
とくし取しかるまじく出へしと也  
一書上佐吉名務志上曰松津園徑吉大祿官毎年  
九月十三日慶れ市として大津事あり商人非お  
さしなし、此等しき事ふを能なりしとて法人  
突了也

深かきに赤し。出方をも 叙か守

哉秋にせ下りて 嬰粟よかふれり

思考大なるときを乾坤よりかきわたりし  
時と芥子よかたれくとも千夏自在の潤し  
此白と喜夏のやうよとけ長れ活斗おれし  
秋のせりして又是を芥子粒の中に入心地し

とくし取花はをたし

照老杜

盤凡以吹し管秋歎するを 誰子そ

一書上之杜詩よを悲秋強自寛奥某今自及君  
歡羞將三冠裝還吹帽是なり

思考多し杜故を小杜といひ杜子安を老杜と  
いふん詩よ於て、杜南体もて甲しは七歳のとき  
賦頌を上げて自稱す七歳属解多、樂天もせられて七  
ヶ月しり能書を展ふ姉之無兩子け指て減る  
事一百度多れともたしりしを曲水への  
と多れや以てとてつに哀事け肯許さくつ  
西川の端にたしり樂天の賜をあらは杜子

方寸より入旅のらうに於鄙哉かそへて十代指ふさ  
れとあり

胡蝶之舞風を吹てとと精例する

一本に風舞を吹てとと

巨考天和二年に吟うて夏風なり

相うかく秋乃流了和等れ一も

松風は秋乃流了和等れ一も

胡蝶之舞風を吹てとと精例する

一本に風舞を吹てとと

巨考天和二年に吟うて夏風なり

相うかく秋乃流了和等れ一も

松風は秋乃流了和等れ一も

白秋百五十一

拾遺二見にわりの流けり 秋 巻

一本に二見へふまじりと出に古雅之是大切のて母と  
すうよくし味をふる一ニ見一初と斗おもむか  
におほく此人に此字よ心ゆきいと憐る一英傑  
此如行前にはふかの人しに蓋才におまはるとり  
之拾遺二見よおねりともふかの流けり  
山末集に「いふる二見此うら路は貝合  
とておあふちりり此白につきて極くの怪  
ありといへとも用ひかひりれをす人て  
とも月をいめて板長くぬにとも  
とよ近宮を十季同にともかす  
て近宮あもつと

内宮を事なすに及んで外宮

此迄字にあひて

さきたに皆おし合ぬ所 近 宮

秋や月より引まよふ三布 蒲葺

元祝奉にて

ゆく嫁や 手紙ひろけきる栗の穂

一本に秋風やまを渡けたると出寸を頼す少秋

風も七月も八月もなす少秋の念誦をん

せむしそとをひろけきりとも自然とそ懐か

らさるる

秋秋此物たのもしやき蜜 柿

香雪云杜甫一双白魚不足為三寸 茨梅物自壽

万秋百五十七

小名木は相実亭

秋よ海ふくゆきもや末も小松川

掲げあか茶を風は秋もきりく

きけふの秋ちよちよ少秋の時ふ

と秋る事と見つて秋も巨魁 柿

題む

秋何と事を何とさるく秋は丸

不見云或は方は法書季吟随筆のうら此合哉

秋よと概きりす惟れ名白くとき

愚考なる所と其以の名白と称ふもむへ之

むし秋歌を坊と誰もし一途よ密けを

白得さるきを人々葉もむ取を飛出さる秋

さしと縁れ風のさびしさをむきひ珠に  
国のあはれさるる昔れちり雲路よむらひさかく  
おろしとく後ある事一凡意よはるは

風妖くすくきたに板の雨すこし

咽月七鼻の先さるる光鳴さる

丁突云明鏡山よとれ吟ちり鎌倉由井ヶ浜乃  
西水よとく坂の下とりふまよらるる光鳴さる  
枝本座よとく東浦よあるるは榎林に二燈を  
危るるさ大地さる

穂すくきたにおもふまさるる世をた

雲一く水客梅は色よ志みたるは

客相ら秋ちりも冬く近け礼はく

白秋百五十八

或人平らきて云「月見はる病よ」つと「き  
れ白と若よ」と教もさる「いひ来り又白草  
よも教もさる」といふ「教もさる」といふ  
非さる「世間の人評判や」思意はる「い  
まを云さるる御徳を志ぬ人れ杜撰さる  
さあま白れもさる」といふ「いふは飽と  
中の人よもむもさる」是も「虚言れもさる  
よと」はる「れ角とつふ」之れもさる「  
はる牛は角とつふ」実の事と「かたけ  
くさく」月やも「れをむもさる」月見は  
ふく「は相志をかさる」此外も「月を見  
るもあはれはよまらむ」秋情の常と「艾つ



なまむいなるよりかき系も牛は角よりさす  
の實さりき自節よりかたしとあつむひき  
被るゝの恥辱をさくへり、愚なるが馬  
耳目く

秋の空客を序を中柱  
二人してつらつらに北 翁  
初月や向ひよ家のなまき

白秋百五十九年

追記 山崎よりおくる

春 普門おもむ 右 初より  
所 依 不 の 夢 泣 けり けり  
遠 傍 け 登 森 の 所 也 秋 の 風  
稻 妻 也 椽 木 也 葉 也 秋 の 波  
必 け 也 八 系 也 月 氣 比 の 月  
愚 考 必 け 也 八 系 也 月 氣 比 の 月  
八 系 と 唱 へ る 不 不 勝 本 一 也 必 け 也  
絳 糸 也 必 八 系 と 稱 する 月 氣 比 也  
一 系 也 必 八 系 也

絳の中山  
中山や絳路も月も又いのち

愚考是も佐友の中山令と有り此  
寺をあのびよせて城郭の城北中山  
と稱しるもの歟一

あす此月雨しくやをむ比那う橋  
比那う橋未考

在是と永平寺のる船橋  
といふ所は十八艘をつな  
ぎて渡りたるを渡す

橋柳をとりたるも月を志のあか

愚考丸岡も永平寺も城郭なり  
志は付還りたるありし守 全津 長崎  
亦橋 福井 是も本道なり 全津 丸岡

永平寺

二十公船の舟橋なり 是も橋柳此  
又ふ字よりいふやうに 舟と予とかの  
橋道は通し 舟を志し

衣袋て小貝 捨をむいろの月  
いろ此溪の小貝とて茶もええたり

勝河や孫も蒲菊を喰ふたり

愚考孫もては馬士乃傳字  
甲加路やとの蒲菊の名馬  
此地はとての所あるなりとも  
未考

船柳の尾上の鏡や秋の書

猿をきく人換子よ秋の風いふ  
 少峰云唐詠物詩選卷之七禽獸部蘇橙  
 聞様の詩よ秋風飒々猿声起客恨猿哀  
 一相似謾向孤危驚客心何曾解入笙  
 歌耳まゝ末の詩のまゝかへ  
 ○東山月のおやうあてな  
 或人のゆとりう花の夕やうと  
 りておらる  
 悪草能う夕もせよまう山れ  
 云う字もう付すりいむつうき端虫  
 てもあるうあう花をやはらうゆい  
 ううてい

白秋百六十一止

佛頂禪一画賛乙幅所一画

蓮の美此上一小魚を

不入長流深 蓮其寄此身  
 智門何得識 活潑一金鱗

哮喘下

去方より太のまうをうはうるうよりうまう  
 誰くれをう祿さうつる中小松杜云う高紀う  
 小俣う相うありと芭蕉う佛頂禪う  
 對面の時う所う曰う佛う又うありや  
 ありう佛もう人のう案う山う子う

祿所 ありしとや  
ありしとや

勝沼やとる士と蒲萄をくらひやう

本二文も勝沼とおし。孫々とあり。全非あり  
或日甲州の門人風尾と下院の秋勝と牛彦  
平一仰り合せりかの勝沼の蒲萄は夏を写  
小勝沼よりとるやうく甲一府より二宿自前  
勝沼篇より蒲萄の多しありとて秋勝  
も勝沼乃事一を妻しく知く物強る  
されを孫と馬士ありしり必定く

秋

加

秋月の星戸れくもや虫の夢

電の聲よまむおやまきりくは

たむくし免後を都えりかの月

是皆古酒よとるえりく通やう

○或人新しと云 其角の龍徳集よ丁卯の年  
芭蕉庵の月見もと毎保やとるえりくは

名月や池をめぐりてありやう

すめてふよさういおしは清影をあら

その客の舟大橋よ多れて とあれは

今添川の古池たり吟よと大和の三池は

解めりく可し



